

# 愛媛県総合科学博物館における教育普及活動について

岩 田 憲 二\*

The museum-education in the Ehime Prefectural Science Museum  
Kenji IWATA

Recently, museum-education has become an important factor for a museum and curator to adopt themselves to the present current that outer people(visitor,citizen,tax-payer and so on)express their requests toward a museum.Since the foundation of the Ehime Pref.Science Museum,we have carried out various Kind of events as a part of museum-education activity and got many visitors through them.In this paper,author introduced museum-education in our museum,and insisted the necessity and importance of it.

## I 今なぜ教育普及活動か

近年、博物館の活動及び学芸員の活動そのものに対する考え方が、変わってきつつあるのではなかろうか。従来、博物館においては、学芸員の業務は資料に関する調査研究(収集・整理・保管を含む)がメインであって、館の運営や広報企画、そしてそれらの総体としての利用者増等に関してはそれほど関わりを持たず、それら業務は主として館長・副館長等の管理職や庶務部門の受け持ちであるというのが一般的な考え方であった。

しかしながら、ここ10年ほどの間に設立された大型の県立クラスの博物館に特に顕著に見られることであるが、大部分の館で教育普及担当の課(係)を設置して学芸系職員を置き、調査研究業務を受け持つ学芸課とは別立ての組織編成となっている。教育普及専門の学芸系職員を設置し、(彼らが)博物館の学芸活動に関する広報や各種事業等を担当することにより、教育普及活動を一層効果的かつ組織的に実施する体制が整えられた。別の側面から見れば、近年の情報化・高齢化・生涯学習の進展・余暇の増大等によって、入館者、地域住民、はては納税者といった外部の利用者から博物館に対する期待や要望がこれまで以上に高まり、博物館にとっては自ら外部に向かって自己主張をしなければならない時代を迎えることになった。学芸員にとっては、研究のみしていればよいという時代から、外部の意見や要望を意識して仕事を進めなければならない時代になった。

愛媛県総合科学博物館では、開館以来様々な博物館事

業を実施し、教育普及事業を主体とした博物館運営を行ってきた。当館では、教育普及担当の部署として、学芸課とは別の振興課に企画普及係を設置し、講座や講演会といった学芸部門の事業の実施主体となっている。ここでは、当館でこれまで行ってきた教育普及活動を取り上げ、その現状と今後の方向性について考える。

## II 総合科学博物館の教育普及活動

当博物館では、表1の通り、開館以来多種多様な教育普及活動を展開しており、色々な事業を実施することにより、入館者増・リピーター増・館の知名度アップ・地域社会への貢献等、様々なプラス効果を挙げてきた。実際に各種事業を行うにあたっては、下記の基本的考え方をもって実施している。



写真1 特別展「宇宙開発の過去・現在・未来」  
(H9年10月25日～11月24日)

\*愛媛県総合科学博物館 企画普及係長

Ehime Pref.Science Museum

表1 総合科学博物館における教育普及活動等

(平成9年度)

	業 務 名	主 な 業 務 内 容	備 考
①	博物館講座の開催	・年間の講座計画の策定 ・講座の広報 ・講座の管理運営	66講座／年 ポスター・チラシ・リーフ 受講手続き・講座運営等
②	学術講演会の実施	・講師の選定 ・講演会の広報（受講者募集） ・講演会の開催	年3回（夏・秋・春） ポスター・各種チラシ 会場設営・行事運営等
③	印刷物の刊行	・たより，年報，図録，各種広報資料等	編集・発送等
④	映画会の開催	・年間上映計画，購入及び借入れ手続き ・映画会の広報 ・映画会の実施	年12回（第2土曜日） 手製ポスター・チラシ 集客，上映
⑤	企画展の管理運営	・企画展の企画及び広報 ・企画展の運営	ポスター・チラシ他，広報活動 展示監視員・関連イベント等
⑥	特別展の実施	・特別展の実施運営	「欧米の科学博物館」，「宇宙開発の過去・現在・未来」実施
⑦	展示案内に関すること	・展示案内員の管理 ・研修	
⑧	学校との連携業務	・学校団体の受付管理 ・学習ノートの発刊	来館予約の受付，調整，データ化 小中学校用
⑨	友の会運営	・会の広報 ・会員管理 ・年間行事の計画と実施	会員募集，会報作成など 文書発送，会員証作成など 29講座／年（天体観望会他）
⑩	各種事業の実施	・共催事業の実施 ・館主催事業の実施	日本科学振興財団等との共催ロボ ット相撲，おもしろ講座等
⑪	講師派遣	・各種講座，教室の講師に学芸員を派遣	P T A，自治体行事等
⑫	他の博物館との連携	・博物館団体との交流 ・他館資料の収集整理	日博協，全科協，全科携等
⑬	教育実習の受入れ	・実習生の受入れ ・カリキュラムの作成	教育実習の窓口
⑭	予算業務	・学芸課，企画普及係担当事業の予算	

### 1 学芸活動の成果の還元

学芸課の学芸員の資料調査等によって挙げた学術成果を、各種事業を通じて外部（入館者・地域住民・納税者）に還元し、博物館の調査研究活動に対する理解を深めてもらう。一般には、博物館講座（自然観察会や科学工作教室等）を開催して、学芸員が持つ専門知識や技術を、受講者に分かりやすく解説したり、或いは企画展・特別展を開催して学術成果を分かりやすく展示したりして、研究の成果を外部に情報発信することが、代表的な還元例である。

### 2 集客事業の一環として実施

様々な事業を行うことによって、博物館の来館者やリピーターを増やし、館の知名度を上げるといふ、館の広報と集客の役割を教育普及活動がになる。具体的には、講演会や映画会の開催、企画展を含む各種事業の開催、そして催し物に付随する広報誌紙の発刊等が、集客事業の一環としての教育普及活動にあたる。

### 3 博物館を軸とした新しい価値観・評価基準の創出

従来の学校教育の枠とは別の、学年、年齢、性別等にとられないクラブ的機能を持った組織として、博物館を位置付ける。クラブ的機能とは、たとえば天文とか昆虫、化石、科学工作といった特定の分野に興味や能力がある「同好の士」が博物館に参集し、それぞれの能力に

応じて楽しみながらその分野を極めることができる場として、博物館が機能することである。地域住民を横断的につなぐ「自然科学クラブ」として博物館が機能し、特に青少年の科学する心を育てるための受け皿として博物館が位置付けられるよう、教育普及事業を基盤にした博物館活動を展開する。

現在のところ、友の会で天文好きが集まった「天文クラブ」の活動がこうしたクラブ的価値観の創出に近い役割を果たしており、適宜、こうしたクラブの活動を活発にしていく予定である。

平成6年11月に開館して以来、当館では様々な教育普及活動を行ってきて、多くの来館者を集めた。表1の各事業項目毎に年度別の事業参加者数と、総入館者に対する事業入館者割合を表2にまとめた。平成9年度では、館の総入館者の約27%が事業に参加し、年々参加率が高くなっている。ただ、参加率の高さはあくまでも相対的なもので、総入館者数が低下しているために起こっている。

表2 教育普及活動受講者と入館者

	6年度*	7年度	8年度	9年度**
博物館講座	801	1,772	1,700	1,524
講演会・シンポジウム	300	1,032	1,180	800
映画会	1,806	4,840	3,020	2,220
企画展	—	35,036	51,215	35,167
特別展	—	40,923	—	12,247
友の会行事	—	286	416	455
各種事業	—	11,731	1,683	820
小計(a)	2,907	60,584	59,214	53,233
総入館者数(b)	170,727	359,915	257,341	201,024
a/b	1.7%	16.8%	23.0%	26.5%

\* (参考) 平成6年11月11日～平成7年3月31日

\*\* 平成9年4月1日～平成10年2月28日

### Ⅲ 教育普及活動の具体例

これまで述べたとおり、当館においては様々な事業を展開し、館の広報や集客に貢献してきた。ただ、教育普及活動の実施の方法や考え方については、博物館毎にそれぞれ特色があると思われるので、当館における教育普及活動の例を以下に紹介する。なお、当博物館においては、振興課企画普及係（学芸員3・事務職1・臨時職員1・展示案内員15）が教育普及活動を担当している。

#### 1 博物館講座の実施

当館では、6種類の博物館講座（自然科学教室・自然観察会・天体観測会・科学工作教育・科学実験教室・産業講座）を年間66講座開催している。講座の講師は、博物館の学芸員が担当する場合と、外部の専門家に依頼する場合があるが、今後、学芸員の調査研究の成果が挙がるにつれて、自前講師を増やしていくことも考えなければならない。なお、講座を実施するにあたっては、下記の方針や内容で事業を進めている。

##### (1) 講座の基本方針

###### \* 学校で教えていないプログラム

例えば、電子工作や、野外観察、天体観測、標本作り等、学校で体験できない（できなかった）講座内容を組んでいる。学校の教育内容と重ならないことで、学校で習っていないことを学ぶという、講座参加の目的と意義を明確化し、また、そのことが知的好奇心や興味を刺激するので、より一層効果を高めることができる。



写真2 自然科学教室「海藻の標本を作ってみよう」(H9年6月22日)



写真3 自然観察会「小川の生きもの」(H9年8月22日)



写真4 科学実験教室「お湯で融ける金属の実験」(H9年11月2日)

**\*参加体験型講座**

教室内で講義を聴くだけの受け身の講座でなく、工作・実験・観察等といった受講者が自ら身体や五感を使った。いわば参加体験型の講座を実施する。

**\*子どもの長所を伸ばす**

「ほめる・叱らない・点数を付けない」といった点に配慮して講座を運営し、子どもの長所を伸ばす工夫をする。

(2) 受講者の募集および広報

受講者の募集は、広報用のチラシの配付を中心に行っている。特に小中学校へのチラシの配付は大きな広報効果がある。学校へのチラシ配付については、下記の通り、市町村教育委員会経由で配付している。目下のところ、教委経由でのチラシ配付が最も効率的である。講座の受講生募集の印刷物としては、チラシ以外にポスター・リーフレットも配布しており、表3のとおり配っている。

表3 講座の募集広報

ポスター	リーフレット	チラシ
年1回(4月)	年1回(4月)	年4回(4・7・10・12月)
学校、図書館、博物館等	学校、友の会、館内配布等	学校、友の会、館内配布等
5,000部	10,000部	各回90,000部

**\*チラシ配布ルート**

博物館→市町村教育委員会(学校教育課)→小中学校→生徒(1枚/1人)。東予地方(愛媛県東部)と松山周辺地域のみこの配付方法。県内他地域の小中学校には、学校ごとに配付した。なお、受講応募者が定員の半分にも満たない時は、その講座の過去の受講者宛てにダイレクトメールを出して追加募集をする事もあり、大変有効な募集手段となっている。この様に、当館においては印刷物の配布・郵送が受講者募集の原動力となっている。

(3) 講座の管理運営

講座の年間の応募者は2,000人を超えるので、受講者の登録・受講通知・名簿作成など受講者のデータ管理は全てパソコンで行っている。受講申込は往復はがきで受け付け、受講者の個人データベースを作成している。前述の追加募集の際のDM郵送など、迅速な対応が可能である。実際の講座の運営は、企画普及係(1名)+学芸課学芸員(2名)が担当し、これに外部講師が加わる。

表4 講座応募者データ

・平成9年度講座受講者(H10.1.9現在)

住所	件数	%
新居浜市	935	46.3
西条市	285	14.1
今治市	172	8.5
周桑郡	159	7.9
宇摩郡	107	5.3
伊予三島市	81	4.0
松山市	72	3.6
川之江市	59	2.9
越智郡	57	2.8
東予市	34	1.7
その他	58	2.9
合計	2,019	100.0

・平成7年度講座応募者

住所	件数	%
新居浜市	1,359	59.4
西条市	266	11.6
伊予三島市	104	4.5
周桑郡	95	4.1
宇摩郡	93	4.1
川之江市	92	4.1
東予市	77	3.4
今治市	48	2.1
松山市	34	1.5
越智郡	28	1.2
その他	93	4.0
合計	2,289	100.0

(4) 受講者データ

表4は、平成7年度と9年度の講座応募者のデータである。いずれも、地元の新居浜市からの応募者が最も多く、次いで西条市という順番は変わらない。やはり、地理的条件や交通の便から、地元の両市からの応募者が多いことがわかる。一方、松山市・今治市という県内の大都市からは、やや距離が離れていることもあって7年度の応募者は2%前後と少なかったが、9年度はいずれも倍以上の伸びを示した。これは、小中学生へのチラシの直接配付(前記1枚/人)を、8年度途中から両市にも始めたからである。

表5は、科学工作教室・科学実験教室(共に小4~中学生対象)の受講者のアンケート調査の結果である。両方の教室共、受講者の大部分は小学生で、中学生の受講は極めて少い。講座に対する評価としては、全般的に肯定的な意見が過半数を占める。

表5 工作教室・実験教室受講者アンケート

* 科学工作教室 (H8年度/12回)					
学年	受講者数		易しい	普通	難しい
小4	51	工作の内容	52	94	33
5	57	説明の仕方	127	47	5
6	44	テキストの内容	111	57	12
中学生	20	合計	290	198	50
その他	8				
計	180				

  

* 科学実験教室 (H8年度/12回)					
学年	受講者数	易しい・判り易い	普通	難しい	
小4	106	実験の内容	64	116	28
5	42	説明の仕方	175	46	4
6	41	テキストの内容	125	70	12
中学生	3	合計	364	232	44
その他	10				
計	206				

(科学技術研究科資料による)

2 学術講演会の開催(シンポジウム・科学講演会含む)

当館では、地域住民に最先端の学術情報を提供し、科学に対する関心を深めてもらうために、県外から講師を招いて学術講演会を開催している。この学術講演会には、年3回開催している通常の講演会の他に、科学実験を交えた科学講演会(おもしろ科学講座)、シンポジウムの際の基調講演も含めている。講演会の講師は、原則として県外在住者で、各専門分野の第一人者を選定している(表6)。

年3回の学術講演会は、原則として夏・秋・春に開催しており、夏はその年の企画展のテーマにあった講師を選んでいく。平成8・9年度2年続けて開催した「おもしろ科学講座」は、当館の有馬明人館長を講師に、科学技術研究科学芸員(4名)をアシスタントに、物理の諸現象を実験を交えて分かりやすく解説する科学講演会で、小中学生から大人まで大変好評を博している。

表6 これまでの学術講演会等の講師

講師名	演 題 (開催日)	分 野
有馬朗人 (当館館長)	科学の楽しさ (H7.2.11/開館記念シンポジウム基調講演)	物理学
◎荒巻重雄 (東京大学名誉教授)	火山噴火のメカニズム (H7.8.19)	地球 科学
◎菊池 健 (元高エネ物理研究所長)	物質と宇宙 (H7.11.11)	物理学
小尾信彌 (放送大学学長)	ビックバン宇宙と私たち (H7.12.17/プラネタリウム記念シンポ基調講演)	天文学
◎中村桂子 (生命誌研究館館長)	生命誌の扉をひらく (H8.3.10)	生命 科学
◎小島郁生 (元国立科博研究部長)	恐竜の謎にせまる (H8.8.4)	古生 生物学
有馬朗人 (当館館長)	科学の楽しさ大切さ～熱とエネルギー～ (H8.8.8/おもしろ科学講座)	物理学
◎有馬朗人 (当館館長)	日本人と独創性 (H8.11.9)	物理学
◎黒田玲子 (東京大学教授)	右の世界左の世界～分子レベルの対 称性の不思議～(H9.3.9)	生命 科学
◎種村直樹 (レイルウェイライター)	日本の鉄道ぶらり乗り歩き (H9.7.26)	鉄道
◎西澤潤一 (前東北大学総長)	日本の科学技術と未来 (H9.11.3)	電子 工学
有馬朗人 (当館館長)	科学の不思議さおもしろさ～電気・磁気・ 電波～(H10.1.25/おもしろ科学講座)	物理学
◎伊沢紘生 (宮城教育大学教授)	サル社会の論理と人間社会の論理 (H10.3.14)	動物学

◎年3回の学術講演会



写真5 おもしろ科学講座「科学の不思議さおもしろさ  
～電気・磁気・電波～」(H10.1月25日)

学術講演会はいずれも、300名収容の当館多目的ホールで開催しているが、実際のところ講演会参加者を定員どおり集めるには、外部に対する多大な広報が必要である。広報の手段は、講座の受講者募集の場合と同じくチラシ・ポスターの配付が中心である。ポスターの配付先は、学校・社会教育施設・県関係機関が主であるが、チラシの場合はそれらに加えて、講師の専門分野ごとに的を絞ったDMを発送している。例えば、講師が物理学の専門家なら、大学等の物理系教員や他の理系教員、小中高の理科教員、物理学会会員、関係研究機関といった様に、博物館まで足を運んで講演会を聴いて貰える確率の

高い職業・集団にチラシを送る。講演会の広報の範囲は、県内はもとより四国（特に高速道路で直接結ばれている香川・高知両県）、そして岡山・広島の上陽側にも配付している。

講演会の受講者のデータを、平成9年秋に開催した西澤潤一氏の学術講演会を例に紹介する。受講者は、講座の場合と同じく地元の新居浜市、次いで西条市が多いが、香川県からの受講者もいる（表7）。学術講演会の場合、高校・一般を対象としているので、受講者のほとんどが高校以上である（表8）。

表7 講演会受講者  
(平成9年11月3日/講師：西澤潤一東北大学前総長)

住所	件数	%
新居浜市	171	56.6
西条市	50	16.6
松山市	25	8.3
宇摩郡	11	3.6
今治市	10	3.3
東予市	10	3.3
香川県	8	2.7
越智郡	5	1.6
その他	12	4.0
合計	302	100.0

表8 講演会受講者年齢階層

年齢	受講者数	%
～15	1	0.5
15～25	15	7.7
25～35	35	17.9
35～45	31	15.9
45～55	51	26.2
55～65	41	21.0
65～	21	10.8
計	195	100.0

(年齢未記入者115名除外)

<年齢≤

### 3 友の会の運営

当館では、博物館と外部（地域住民等）を繋ぎ、地域と密着した博物館活動を行い、かつ、館でカバーできない事業を実施するために友の会を設置している。平成7年10月に設立以来、延べ人数にして毎年約1,500人の会員を集め（表9・10）、多くの事業を実施してきた。

表9 友の会会員数の変遷

	設立時 (H7.10.1)	7年度末 (H8.3.31)	8年度末 (H9.3.31)	9年末 (H9.12.28)
小中学生会員	9	11	10	5
大人会員	36	57	51	47
家族会員	139	269	314	341
(延べ人数)	(633人)	(1,235人)	(1,456人)	(1,537人)
賛助会員	17	44	45	43
(口数)	(20口)	(52口)	(50口)	(47口)
計	201件	381件	420件	436件

表10 地域別会員数 (H9.12.28)

住所	件数	%
新居浜市	223	51.1
西条市	69	15.8
松山市	28	6.4
今治市	20	4.6
周桑郡	14	3.2
宇摩郡	13	3.0
東予市	10	2.3
香川県	10	2.3
その他	49	11.3
合計	436	100.0

現在、友の会では年間29講座実施しているが、原則として博物館講座などの館の事業内容と重ならない様工夫したり、博物館ではできない事業も実施したりしている。例えば、友の会の天体観望会では、ホールポップ彗星観望会（H9.4.12）や部分日食観察会（H9.3.9）を臨時に開催したり、研修旅行を催したりしている（表11）。



写真6 友の会天体観望会「部分日食を見よう」(H9年3月9日)



写真7 友の会工作教室「電子ピカピカホタルを作ろう」  
(H9年7月21日)



写真8 友の会自然教室「夜の昆虫採集」(H9年8月2日)

表11 平成9年度友の会年間行事表

日 程	講 座 名 (内 容)	講 師	時 間	参加人数
4/12(土)	天体観望会「ヘール・ポップ彗星観望会」	天文クラブ	19:00~20:30	27名
7/12(月)	工作教室「電子ピカピカホテルをつくろう」	田中会員	13:00~16:00	19名
7/30(水)	企画展見学会「出発進行!愛媛の鉄道」	橋本学芸員	11:00~11:30	14名
	例会「化石のお話」 「魚のお話」	植田会員 大西学芸員	13:00~14:00	13名
	企画展見学会「出発進行!愛媛の鉄道」	橋本学芸員	14:30~15:00	17名
8/2(土)	自然教室「夜の昆虫採集」	自然研究科	19:00~21:00	30名
8/14(木)	企画展見学会「出発進行!愛媛の鉄道」	藤本(雅)学芸員	11:00~11:30	22名
	例会「赤石山系の岩石」	富吉学芸員	13:00~14:00	16名
	企画展見学会「出発進行!愛媛の鉄道」	藤本雅学芸員	14:30~15:00	13名
8/19(火)	科学教室「さまざまな観察会~草木で紙をつくろう~」	田島学芸員	10:30~12:00	16名
			13:30~15:00	8名
9/27(土)	天体観望会「木星の観望」	天文クラブ	19:00~20:30	9名
10/25(土)	天体観望会「木星・土星の観望」	天文クラブ	19:00~20:30	27名
10/26(日)	巡回展見学会「宇宙開発の過去・現在・未来」	—	11:00~11:30	9名
	例会「愛媛の蝶」 「たのしい算数パズル・ゼミナール」	三谷監事 進学芸員	13:00~14:00	31名
	巡回展見学会「宇宙開発の過去・現在・未来」	—	14:30~15:00	33名
11/16(日)	遠足「八堂山ハイキング」	—	11:00~14:00	11名
11/24(月)	巡回展見学会「宇宙開発の過去・現在・未来」	—	11:00~11:30	19名
	例会「流れ星のお話(仮)」 「木のかたちのお話」	古川会員 小見山学芸員	13:00~14:00	20名
	巡回展見学会「宇宙開発の過去・現在・未来」	—	14:30~15:00	24名
12/6(土)	天体観望会「月と木星・土星」	天文クラブ	18:30~20:00	18名
12/13(土)	研修旅行「砥部動物園見学」	—	9:00~16:00	37名
12/23(火)	例会「水のお話(仮)」 「冬芽のお話」	真鍋会員 川又学芸員	13:00~14:00	13名
	科学教室「電池の実験」	藤本(光)学芸員	14:30~16:00	9名
1/25(日)	天体観望会「冬の星座と星雲・星団」	天文クラブ	18:30~20:00	7名
2/8(日)	天体観望会「天体望遠鏡の製作と日の観測」	天文クラブ	16:30~19:00	34名
3/1(日)	研修旅行「倉敷科学センター見学」	—	9:00~16:00	82名
3/15(日)	例会「楽しい化学実験の方法(仮)」 「別子銅山産業遺産」	高岡会員 橋本学芸員	13:00~14:00	14名
	自然教室「DNA抽出」	山中会員	14:30~16:00	16名
3/21(土)	工作教室「ロボットをつくろう」	田中会員	13:00~16:00	12名

友の会の事業については、会員なら年齢・性別・経験にかかわらず誰でも参加でき、会員同士で楽しみながら学べる「場」とすることを目的としている。第Ⅱ章で述べた通り、当館の教育普及活動は「クラブ」的性格を持たせることを目的としており、特に友の会活動において、クラブ的価値観の創出を目的としている。中でも、設立して約1年を迎える「友の会天文クラブ」では、会員の中の天文好きが集り、博物館友の会を軸に天文愛好家の輪を広げていく核となっている。友の会では、今後天文クラブに引き続いて科学関係のクラブの設立も考えている。

#### Ⅳ今後の教育普及活動のあり方

これまで紹介した様に、当博物館では年間数多くの教育普及活動を実施し、館からの情報発信や館の広報活動としての役割を果たしている。また、クラブ的価値観の創出の場として館の教育普及活動を位置付け、従来の学校教育などの価値観・評価基準とは異なる尺度の導入・実現を図っている。しかしながら、博物館が外部（地域住民等）に開かれた存在であらんとする限り、情報発信・広報活動・クラブ的価値観等の役割に加えて、時代の流れに即応した教育普及活動が必要となってくる。具体的には、情報化時代・生涯学習時代・学校週5日制への対応である。

情報化時代への対応というのは、具体的には博物館資料のデジタル情報化とそれに伴う外部への資料公開である。大量の資料を瞬時に高速処理するというコンピュータの特性を生かした社会が既に到来しており、その時代の波は博物館も避けることはできない。むしろ膨大な資料をかかえる博物館こそ、コンピュータの特性を生かした情報発信が必要とされる。これは、入館者に対するパソコン端末レベルでの資料や情報の提供だけでなく、例えばインターネットを介して館外へリアルタイムに提供することも必要となろう。

生涯学習時代、つまりあらゆる社会階層に様々な教育の機会を提供する時代をむかえ、博物館も広く外部から地域住民の参画を求めていかなければならない。博物館においては、ボランティア制度の導入が、生涯学習時代に最もふさわしい対応といえる。高齢化時代の進展や相俟って、様々な経験の持ち主に、それまでの技術や知識を博物館で活かしてもらい、自ら学習を深めつつ来館者にその成果を提供する事が、今後望まれる。

学校5日制の導入はあと数年後には実現するが、博物館がその受け皿として有効に機能するよう社会的要請が一層高まると予想される。また、児童・生徒側からの教育普及活動への参加希望も一層高まると予想される。当館においては、講座や友の会など教育普及活動の充実と、学校サイドとの連携強化が、今後益々必要となってくる。